

横丁句会の記録

二〇〇四年七月二十七日
二〇〇五年七月二十一日



横丁句会一周年の記念句会出席メンバー。

前列左から内藤呈念、大庭擬宝珠、高橋なには橋、吉田鉄井、井上青軸、後列、荒谷黄昏

〓二〇〇五年七月二十一日、東京・中央区銀座、料理屋「杉林」
内藤呈念撮影

目次

[illegible]

表紙、裏表紙 吉野 二〇〇五春
(撮影 内藤呈念)

あとがき

この冊子は、「横丁句会」の一年間の活動の記録です。

「横丁」は正しくは「ご隠居横丁」といい、メンバーらの勤める朝日新聞東京本社学芸部（現文化部）の、一区画の呼び名です。内藤呈念さんは、OBですが、横丁の住人だったころ俳句欄を長く担当されました。「ホトトギス」の同人でもあります。

荒谷黄昏さんと吉田鉄井さんは、呈念さんと同時期の横丁の住人で、整理部で特集版担当だった縁から界限を徘徊していた井上青軸も加わり「俳句勉強会」を持ったのが句会の始まりでした。顛末は第一回句会記録の末尾にメモとして書いておきました。

当初メンバーは内藤呈念、荒谷たそがれ、吉田JunJun、不運玉玩具庵の四人でした。JunJunと不運玉は、その場で適当につけた俳号もどきでしたから、師匠になった呈念先生から次の回に俳号をもらい、それぞれ「吉田鉄井」「井上青軸」になりました。「鉄井」は健啖家のJunJunさんを「鉄の胃」に譬えたものです。青軸は本名の「せいじ」をもじったものです。

せっかくだからほかのメンバーの俳号の謂れも書いておきます。

その後、忘年句会に参加した米原幌櫃さんは、「白鳥」の句など「滅びの美学」が人気を集め、メンバーの提案を受けて「幌櫃（ほろびつつ）」を名乗ることにになりました。同じ時に参加した「上坂酔童」さんは自身の命名。たそがれさんも、自分の命名ですが、七回目から「たそがれ」を漢字の「黄昏」に改名。姓とのバランスが良いからとの、呈念先生の勧めによるものです。

「高橋なには橋」さんは、別の句会で使っている俳号で、大阪本社に勤務した縁とのことです。

大庭擬宝珠さんは山菜としても重宝される園芸植物オオバギボウシから。呈念先生の命名です。「呈念」は会社を定年退職した際、ホトトギス主宰の稲畑汀子さんからもらったものだそうです。

記録はおおむね青軸が担当し、一部黄昏さんにお問い合わせしました。冊子にするに当たってゲラを回覧し、直し要請があったものは直しました。そのため、各回の個別の記録とは、若干違いがあります。写真は浜離宮の菜の花など数点以外は呈念先生の撮影です。

句会記録「横丁」

ご隠居横丁句会の一年

(二〇〇四年七月二十七日～二〇〇五年七月二十一日)

二〇〇五年十二月発行

十二月三十一日2刷

発行人 井上青軸

